

轉法輪、入滅の事蹟で往時靈場となつた四箇所で、信仰の對象物を商人が賣つてゐたものである。

第四に、之等の記念品は、當然佛陀在世中の記念と結んでゐる聖跡を現はして居、之等聖都の附近では、夫々の記念に對して一般信仰が向つたのである。即ち、拘尸那竭羅附近では涅槃の塔、婆羅捺斯附近では法輪、佛陀伽耶附近では菩提樹、迦毗羅衛附近では藍毗尼園の蓮である。

第五に、蓮、樹、輪、塔、之等の象形文字的象徴は、絶えず圖形と結んだ聯想で、佛陀の四大奇蹟を現はすものとせられ、之が爲に、古代佛教聖地の玉垣や門に際限なく寫されたのである。

第六には、時を経ると共に、此の慣習は、常に印度に見る如く法則となり、世尊の生涯中、何れの場面を現はすにも、從來通りにすれば足りる事となつて了つたので、目に見えないが佛陀の現在する事を、其の意味を示す象徴で思ひ浮べる様にすれば足りたのである。従つて、古代派に屬する浮彫では、全部佛座が常に空しい所以である。